



子どもをもつこと (不妊)

性腺機能に影響を及ぼすがん治療により、不妊となる可能性がある小児・AYA世代のがん患者さんや、将来お子さんの希望がある患者さんに妊孕性温存療法が適応となる場合があります。

□ 性腺機能に影響を及ぼす可能性のある治療

<男性>

精巣や骨盤内の手術、精巣への毒性が強い抗がん剤治療（アルキル化薬）、精巣・脳（下垂体、視床下部）への放射線照射

<女性>

卵巣や骨盤内の手術、卵巣への毒性が強い抗がん剤治療（アルキル化薬、白金製剤）、卵巣・脳（下垂体、視床下部）への放射線照射

<共通>

インターフェロン(IFN)-αチロシンキナーゼ阻害薬

□ 妊孕性温存療法

- ・妊孕性温存療法とは、**卵子、精子、受精卵、卵巣組織の凍結保存を行う**ことです。
- ・がん治療により性腺機能への影響を受けた場合でも、お子さんを授かるための選択肢を残すことができます。
- ・がん患者さんの**妊孕性温存療法は治療前に行う**ことが推奨されており、**生殖医療専門施設への受診**が必要となります。

□ 相談窓口

- ・がん治療により不妊となる可能性について、**担当医にご相談ください**。
- ・不妊となる可能性がある場合は、治療前に生殖医療専門施設で相談することができます。**担当医、担当看護師**または**がん相談支援センター**にお尋ねください。